

石井桃子さんの仕事と 浦和ゆかりの地案内



岩波少年文庫を編集の頃の石井桃子

写真提供：公益財団法人東京子ども図書館

1907年、現在のさいたま市浦和区に生まれた石井桃子は、日本女子大学校英文学部卒業後、文芸春秋社で編集の仕事に携わりながら、犬養毅家の書庫整理にあたり、『ブー横丁にたった家』の洋書に出会いました。

ブーの物語から児童文学の世界の“あたたかさ”にふれた石井は、1947年に自ら創作した『ノンちゃん雲に乗る』を出版すると、1951年の第1回芸術選奨文部大臣賞を受賞し、ベストセラーになりました。

1950年に発売された岩波少年文庫の編集をはじめ、石井桃子は、これまで日本の子どもたちに、たくさんの“読み応えのある本”を創作・翻訳し、紹介してきました。

今回の展示では、石井桃子の著作や翻訳、評論作品の紹介と、幼少期を過ごした浦和ゆかりの地を紹介します。

さいたま市立中央図書館

展示期間 2017年11月21日（火）～12月8日（金）

会場 さいたま市立中央図書館ギャラリー、さいたまゆかりの児童文学コーナー

協力 石井桃子の会

展示資料

初版本、手稿等

石井桃子から星野丑三に宛てた手紙（個人蔵）
「丑ちゃんの思い出」（個人蔵） 「香蘭」平成14年7月号星野丑三追悼号の原稿
『折りびな』田中サタ著、真田房枝画 福音館書店 1969年
『たのしい川邊』ケネス・グレーアム作 中野好夫訳 ※白林少年館 1940年
『熊のプーさん』A.A.ミルン作 岩波書店 1940年
『プー横丁にたった家』A.A.ミルン作 岩波書店 1942年
『ノンちゃん雲に乗る』石井桃子作 大地書房 1947年

※石井桃子が設立した出版社

パンフレット、色紙等

1	「はじまりはプーさん～資料で見る石井桃子」緑区地域文化講演会実行委員会 2003.9
2	「埼玉ゆかりの子どもの本」さいたま文学館 2004.4
3	『本は友だち…』教文館ナルニア国 2007.2.8 ※教文館ナルニア国のために書かれた色紙を縮小印刷したもの
4	「絵本“彩” 発見！埼玉の絵本作家と「こどものとも」さいたま文学館 2009.4
5	「特集石井桃子-子どもと本との幸せな出会いを求めて-」杉並区郷土博物館 2011.6
6	「石井桃子ゆかりの浦和宿を歩く」浦和宿けやき会コラボ企画 さいたま朝日 2015.8.23
7	「石井桃子生誕110年かつら文庫60周年記念 石井桃子フォト・リーフレット」東京子ども図書館 2017.1
8	「石井桃子ゆかりの三室地区を歩く」みむろ文庫 2017.6
9	「石井桃子さん お留守の仕事部屋」 中村 剛／画 2007.11

手作りおもちゃ（石井桃子作製）

「二組のおひなさま - おりびな -」（個人蔵）
「ぱたぱたびょうぶ - 平賀源内 -」（個人蔵）

さいたま市で行われた過去の講演会、展示会

「子どもの本の架け橋 石井桃子の世界」展示・講演会 講師 中川李枝子氏 プラザイースト・東浦和図書館 1999.3
「はじまりはプーさん-資料で見る石井桃子」講演会 講師 小寺啓章氏 緑区地域文化講演会実行委員会 2003.9
「赤羽夕景-高田誠・石井桃子の家路より」展示会 うらわ美術館 2003.11～
「幼ものがたり」原画展 さいたま市立中央図書館 2009.4
石井桃子追悼講演会 2009.4 「『幼ものがたり』と石井桃子」 講師 菅原啓州氏 「『幻の朱い実』と石井桃子」 講師 山田馨氏 「『幼ものがたり』原画を描いて」 講師 吉井爽子氏
「評伝石井桃子を書き終えて」講演会 講師 尾崎真理子氏 さいたま市立中央図書館 2014.10
石井桃子生誕110年記念In浦和「本は一生の友だち」展示会 さいたま市立中央図書館 2017.3. 共催：石井桃子の会、さいたま市図書館友の会

石井桃子略年譜

1907 年（明治 40 年）3 月 10 日	埼玉県北足立郡浦和町（現在のさいたま市浦和区）に生まれる
1913 年（大正 2 年）	埼玉県立女子師範附属小学校入学
1919 年（大正 8 年）	埼玉県立浦和高等女学校（現在の浦和第一女子高等学校）入学
1924 年（大正 13 年）	日本女子大学校入学
1930 年（昭和 5 年）	文藝春秋社の社員となる（1933 年に退社） この頃、菊池寛の紹介で犬養毅の書庫整理にあたる
1934 年（昭和 9 年）	山本有三、吉野源三郎のもとで『日本少国民文庫』（新潮社）の編集に携わる
1940 年（昭和 15 年）	出版社白林少年館を設立し、『たのしい川邊』（中野好夫訳）出版 『熊のプーさん』（岩波書店）刊行
1941 年（昭和 16 年）	白林少年館から『ドリトル先生「アフリカ行き」』（井伏鱒二訳）出版
1942 年（昭和 17 年）	『プー横丁にたった家』（岩波書店）刊行
1945 年（昭和 20 年）	宮城県栗原郡鶯沢村へ移住し農業を始める
1947 年（昭和 22 年）	『ノンちゃん雲に乗る』（大地書房）刊行
1950 年（昭和 25 年）	岩波書店入社（1954 年退社） 岩波少年文庫創刊
1951 年（昭和 26 年）	『ノンちゃん雲に乗る』が第 1 回芸術選奨文部大臣賞受賞 同作が光文社から刊行され、ベストセラーとなる
1953 年（昭和 28 年）	岩波の子どもの本創刊
1954 年（昭和 29 年）	児童文学活動への貢献を理由に第 2 回菊池寛賞受賞 ロックフェラー財団の研究員として海外留学
1956 年（昭和 31 年）	瀬田貞二、鈴木晋一、松居直、いぬいとみこ、渡辺茂男（後に参加）と「I S U M I 会」を始める。後に「子どもの本の研究会」と改称。
1957 年（昭和 32 年）	村岡花子、土屋滋子らと「家庭文庫研究会」を始める
1958 年（昭和 33 年）	荻窪の自宅に「かつら文庫」を開く
1960 年（昭和 35 年）	『子どもと文学』（中央公論社）刊行
1965 年（昭和 40 年）	『子どもの図書館』（岩波新書）刊行
1974 年（昭和 49 年）	東京子ども図書館設立
1981 年（昭和 56 年）	『幼ものがたり』（福音館書店）刊行
1993 年（平成 5 年）	児童文学者としての功績を理由に第 49 回日本芸術院賞受賞
1995 年（平成 7 年）	『幻の朱い実』（岩波書店）が第 46 回読売文学賞受賞
2008 年（平成 20 年）	児童文学者としての功績を理由に 2007 年度朝日賞受賞 4 月 2 日逝去、享年 101 歳

石井桃子略歴

1907（明治 40）年に浦和（現さいたま市）で生まれ、育った。日本女子大卒。「日本少国民文庫」（新潮社）の編集・翻訳にたずさわる。1940（昭和 15）年、『熊のプーさん』を翻訳出版。1947（昭和 22）年、『ノンちゃん雲に乗る』を刊行。「岩波少年文庫」「岩波の子どもの本」の編集。退社後 1958（昭和 33）年、荻窪の自宅に「かつら文庫」を開く。その後、かつら文庫の記録『子どもの図書館』（1965 年）を出し、多くの反響が寄せられ、日本各地で文庫活動が活発になった。1974（昭和 49）年かつら文庫は東京子ども図書館に引き継がれ、文庫活動・児童図書館員への啓蒙・研修をおこなっている。96 歳で『今からでは遅すぎる・ミルン自伝』、100 歳を前に改訳版『百まいのドレス』を出すなど、最近も精力的に執筆活動をしていたが、2008（平成 20）年 4 月 2 日、永眠した。享年 101 歳。生涯、約 200 冊の児童図書を翻訳し、それらは日本の子どもたちに現在も読み継がれている。

石井桃子と浦和

石井桃子は、兄 1 人、姉 4 人の 6 人きょうだいの末っ子として生まれた。生家は旧中山道沿いの浦和宿北の端にあり、祖父は金物店を営んでいた。

1913 年に埼玉県女子師範学校附属小学校（現在の高砂小学校）に入学した桃子は、1919 年には県立浦和高等女学校（現在の浦和第一女子高等学校）へ、さらに 1924 年には日本女子大学校英文学部へ入学し、目白へは浦和の自宅から通っていたという。

大学卒業後、文藝春秋社、新潮社で雑誌や書籍の編集に従事するようになり、1939 年に母が亡くなったことを契機に、友人・小里文子から譲り受けた荻窪の家に転居する。

三室（さいたま市緑区三室）には母の実家があり、桃子が幼い頃は季節ごとに泊りがけで出かけたという。また、三室には石井の母方のいところが嫁いだ星野家があり、短歌雑誌「香蘭」を主宰した歌人・星野丑三は同じ年頃の仲間の一人だった。丑三が亡くなった翌年、2002 年には「香蘭」の追悼号に寄稿している。（『石井桃子コレクション 5・エッセイ集』2015 年 岩波現代文庫収録）

1977 年に 70 歳を迎えた桃子は、雑誌『子どもの館』（福音館書店）に「幼ものがたり」の連載を始める。生まれ故郷の浦和で過ごした幼年時代を振り返り書き綴った作品で、家族のこと、あたりの情景や出来事、そして、桃子自身の感じたことや行いを、鮮明な記憶を頼りに物語る。

石井桃子と児童文学

クマのプーさんとの出会い

1932 年、菊池寛の紹介で、犬養家の書庫整理を任された石井桃子は、翌年のクリスマスに犬養毅の孫・康彦に贈られた洋書『THE HOUSE AT POOH CORNER』を子どもたちのために読み始める。これが、石井桃子とクマのプーさんとの出会いだった。のめり込むように夢中で読み、物語のあたたかさに包まれた桃子は、作品の翻訳を試み、やがて、『熊のプーさん』（1940 年出版、岩波書店）、『プー横丁にたった家』（1942 年）の出版へとつながっていく。

ノンちゃん牧場

1945 年、石井桃子は宮城県鶯沢で農業生活を始める。

『ノンちゃん雲に乗る』がベストセラーになり、その印税をもとに酪農を始める。やがて鶯沢酪農組合が設立されると、ノンちゃん牛乳と呼ばれて販売された。

農村での暮らしを背景に、『やまのこどもたち』（1956 年）、『やまのたけちゃん』（1959 年）など物語が生まれた。また、山で飼い始めた猫を主人公にした『山のトムさん』（1957 年）は、版を変えながら読み継がれ、2015 年にはドラマ化された。

岩波少年文庫の創刊

1950年5月 石井桃子は「岩波少年文庫」の編集企画を任される。

「世界の児童文学の古典を正しく伝えて、現代各国の児童文学の新鮮な傑作を紹介して、在来の子どもの本の翻訳児童書にあったずさんさを改めて、正確で美しい日本語の決定訳を作ること」が編集に際しての原則だったという。

同年12月25日に創刊されたのは次の5作品。

1『宝島』（佐々木直次郎訳）、2『あしながおじさん』（遠藤寿子訳）、3『クリスマス・キャロル』（村山英太郎訳）4『小さい牛追い』（石井桃子訳）5『ふたりのロッテ』（高橋健二訳）

岩波の子どもの本創刊

1953年 岩波書店は新たな子どもの本のシリーズとして、絵本の出版を企画し、石井桃子が編集を任される。

①絵本は消耗品だから、できるだけ安く買いよいものにする

②規格、ページ数などはできるだけそろえる

③右開きで縦書き、外国の本でレイアウトを変えなければならないものは編集しなす等を編集方針に、同年12月に第1回配本として、6冊を創刊した。

第1回配本

『ちびくろ・さんぼ』 H・バンナーマン/文、F・ドビアス/絵、光吉夏弥/訳、岡部冬彦/絵

『ふしぎなたいこ』 石井桃子/再話、清水崑/絵

『ねずみとおうさま』 コロマ神父/文、石井桃子訳、土方重巳/絵

『みんなの世界』 M・リーフ/作、光吉夏弥/訳

『スザンナのお人形 ビロードうさぎ』 M・ビアンコ/文、石井桃子/訳、高野三三男/絵

『山のクリスマス』 L・ペーメルマン/作、光吉夏弥/訳編

子どもと文学

1954年から1年間、石井桃子はロックフェラー財団の研究員として海外留学し、アメリカ、カナダ、ヨーロッパの児童図書館や子どもの本の現状を知る機会を得た。帰国後の1955年、日本の子どもの本を再評価するため、石井桃子、鈴木晋一、瀬田貞二、松居直、いぬいとみこの5人で「ISUMI会」を結成した。（後に渡辺茂男が参加）

子どもの本はどうあるべきか、意見を交わした成果が『子どもと文学』（1960年）の出版、『児童文学論』（1964年）の翻訳へ繋がっていく。

家庭文庫研究会

海外留学から帰国した石井は、「子どもが心から楽しんで読む本を出版したい」、「子どもの図書室を開きたい」という長年の思いを行動に移す。一つは1956年から始まる、鶯沢村の小学校5年生に対する週に1度の読み聞かせ活動、もう一つは、1958年に荻窪の一室に設けた家庭文庫「かつら文庫」の開設だった。

1957年には、すでに家庭文庫活動を行っていた村岡花子や、土屋滋子らと家庭文庫研究会を結成し、福音館書店に働きかけ、研究会が翻訳作業を担い海外の絵本を出版する。

1961年には『シナの五にんきょうだい』『100まんびきのねこ』『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』『アンディとらいおん』が出版され、62年には『おやすみなさいのほん』、64年には『ごきげんならいおん』が出版された。

また、かつら文庫での7年間の活動記録を本にまとめ、1965年に『子どもの図書館』（岩波書店）を刊行すると、大きな反響が寄せられ、日本各地で家庭文庫活動が活発になる、石井が始めた家庭文庫における活動は、1974年に設立された公益財団法人東京子ども図書館へと引き継がれていく。

浦和で 石井桃子をよむ

東京に住んでいる人間が、生まれ故郷などといううわさをするには、たしかに浦和は近すぎる。けれども、浦和は、生まれたところだし、両親がねむっているところだし、また、いまも身内が住んでいるところだしするので、私にとっては、日本じゅうでかけがえのない場所なのだ。

「生まれ故郷」（浦和一女新聞 1954 年初出）

『石井桃子集7』、『石井桃子コレクション5エッセイ集』（いずれも岩波書店）に収録）



砂浜の絵をバックに撮影
（右手前が石井さん、小学生ごろ） 大正中期

児童文学作家の石井桃子さんが 101 歳で亡くなって 9 年。その遺産の豊かさは石井さんの不在など感じられないほどです。

とはいえ、石井さんがいないのは事実。いま石井さんを知ろうとするなら、残された作品や言葉にあたるしかありません。まるで物語の登場人物のように、言葉のなかに石井さんを思い描いてゆく…… それは、いまはじめて意識的に石井作品を読む人はもちろん、いままで親しんできた人にとっても、スリリングな読書になるのではないのでしょうか。

そんな石井さんの物語は、ここ、さいたま市からはじまります。

1907 年に現在の浦和区常盤に生まれた石井さんは、幼少の頃の思い出を 1977 年から雑誌上で発表しはじめます。それが『幼ものがたり』です。

■『^{おきな}幼ものがたり』

石井さんは「自分と出会う」（朝日新聞 1991 年 6 月 3 日初出、『石井桃子集7』、『石井桃子コレクション5エッセイ集』（いずれも岩波書店）に収録）というエッセイで、「もうひとり」の自分によって外から見られたと思える記憶について語っています。ある出来事が「ピントの合った写真のように」、「鮮明な写真」として、石井さん自身も映しこんで、記憶に残ってしまうことがあるとのこと。

この不思議な感覚は『幼ものがたり』でも「まるでもう一人の私が、自分を外がわから見ていたように、あたりの情景もろとも、心に描ける」と語られていて、『幼ものがたり』を特徴づけます。

『幼ものがたり』がただの思い出ばなしのようにみえないのは、まるで一枚の写真から事件を推理してゆくミステリーさながら、幼いころの出来事のある決定的なイメージから手探りでたどってゆく過程そのものが書かれているからです。どうしても名前を思い出せない友達がいたり、前後の脈絡を欠いて写真のように焼きついた記憶があったりするかと思えば、話をすすめるうちに思い出してくる出来事もあります。そんなサスペンスと、簡潔でユーモラスな描写がこの『幼ものがたり』の魅力。

そしてさいたま市に住む者の特権は、石井さんが語る舞台が身近にあることです。

「私の家は、中仙道に面していて、昔の浦和の宿の北のはずれにあった」とあるとおり、いまの浦和駅と北浦和駅の間回りです。石井さんはうまれました。そこは幼い子のこと、おもな舞台は生家の近辺に限られますが、だからこそ、浦和を知らない人はどう読むのだろうと不安になってしまうくらい、浦和の描写に満ちています。

もちろんいまでは変わってしまった風景や生活（ちょんまげのおじいさん！）もありますが、『幼ものがたり』のなかの石井桃子は、よりいっそうリアリティをもって私たちのまえに登場してくるはずです。



『幼ものがたり』のころ。前列左から2番目、犬を抱いているのが石井さん。ほか、両親と姉たち、姉の子たち、そして「まあちゃん」。大正中期

■石井桃子と浦和



『幼ものがたり』の取材で、今の緑区三室を訪れたとき（左・歌人の故・星野丑三氏、右・挿絵を描いた吉井爽子氏） 1977年頃

亡くなる前年の10月に、「浦和の昔のことで確かめたいことがあるのだ」と石井さんから図書館に連絡をいただき、資料を用意して、職員が石井さんを訪問する機会がありました。その際手土産に持参したお団子をみて、「駅前の店のものね」と石井さん。「昔、父親である主人が亡くなって、女手だけでどうするのだろうと皆心配していたの。でも、娘三人が店番に出るようになると、師範学校の学生たちの行列ができ繁盛してね。世の中、うまくまわるものだなと感心したものです」と、瞬時に記憶がよみがえってこられたのでしょう、思いがけない話を伺うことができました。浦和はいつまでも気にかかる町であったようです。

『幼ものがたり』以外でも折にふれて浦和について語った石井さん。ぜひ、浦和をきっかけに石井桃子の世界にふれてみてください。

引用・参考文献

- 『幼ものがたり』福音館書店 1981年
 『石井桃子集 4 幼ものがたり』岩波書店 1998年
 『石井桃子集 7 エッセイ集』岩波書店 1999年
 『石井桃子コレクション5 エッセイ集』岩波現代文庫 2015年
 『本を書く人読まぬ人とかくこの世はままならぬ PART2』所収：金井美恵子「私の幼年時に埋め込まれた一部分 石井桃子」 日本文芸社 1993年
 『近代日本文化論 8』所収：石井桃子（川本三郎インタビュー）「本との出会い・人との出会い」 岩波書店 2000年
 『本と浦和』並木せつ子 さいたま市立中央図書館 2008年

さいたま来ぶらり通信 第9号 2009年4月15日より転載一部加筆修正

絵本のベスト 24

1. 『ちいさいおうち』 1984 冊
2. 『ちいさなうさこちゃん』 1213 冊
3. 『うさこちゃんのたんじょうび』 1119 冊
4. 『こすずめのぼうけん』 1056 冊
5. 『ちいさなねこ』 1053 冊
6. 『うさこちゃんとゆうえんち』 924 冊
7. 『うさこちゃんひこうきにのる』 917 冊
8. 『うさこちゃんとどうぶつえん』 854 冊
9. 『ゆきのひのうさこちゃん』 821 冊
10. 『いっすんぼうし』 816 冊
11. 『うさこちゃんのにゅういん』 805 冊
12. 『うさこちゃんとうみ』 805 冊
13. 『100 まんびきのねこ』 745 冊
14. 『ティッチ』 627 冊
15. 『こねこのぴっち』 602 冊
16. 『ようちえん』 566 冊
17. 『ピーターラビットのおはなし』 552 冊
18. 『チム・ラビットのぼうけん』 537 冊
19. 『きいろいことり』 514 冊
20. 『せきたんやのくまさん』 485 冊
21. 『ありこのおつかい』 483 冊
22. 『ふしぎなたいこ』 478 冊
23. 『したきりすずめ』 449 冊
24. 『ゆかいなかえる』 448 冊

物語のベスト 22

1. 『チム・ラビットのぼうけん』 537 冊
2. 『百まいのドレス』 370 冊
3. 『クマのプーさん』 245 冊
4. 『イギリスとアイルランドの昔話』 167 冊
5. 『トム・ソーヤーの冒険』 153 冊
6. 『ノンちゃん雲に乗る』 126 冊
7. 『魔法使いのチョコレート・ケーキ』 124 冊
8. 『ムギと王さま』 98 冊
9. 『ギリシア神話』 95 冊
10. 『おそばのくきはなぜあかい』 94 冊
11. 『かわせみのマルタン』 94 冊
12. 『プー横丁にたった家』 91 冊
13. 『こぎつねルーファスのぼうけん』 81 冊
14. 『たのしい川べ』 79 冊
15. 『とぶ船』 75 冊
16. 『チム・ラビットのおともだち』 72 冊
17. 『べんけいとおとみさん』 67 冊
18. 『グレイ・ラビットのおはなし』 58 冊
19. 『山のトムさん』 49 冊
20. 『ゆかいなホーマーくん』 47 冊
21. 『まいごになったおにんぎょう』 45 冊
22. 『小さい牛追い』 42 冊

※題名の次に書かれている数字は、対象期間中の累計貸出数を表しています。同一タイトルの本は異版もまとめて集計しました。『クマのプーさん』は単行本・文庫・絵本のシリーズを合計すると1263冊貸出されました。

本展示資料の作成にあたり、次の資料を参考にしました。

- ・「石井桃子展」(図録) 世田谷文学館発行 2010年
- ・『石井桃子のことば』 新潮社 2014年
- ・『ひみつの王国 評伝石井桃子』 尾崎真理子著 新潮社 2014年